

# 日本周辺国際魚類資源調査委託事業

津本欣吾・岡本楠清・松尾剛平・柴原浅行・谷水宗美・赤松沙織・中村明菜

## 目的

2000年9月「中部及び西部太平洋における高度回遊性魚類の保存管理に関する条約(WCPFC)」が採択され2004年6月に発効された。我が国も2005年7月に本条約に加盟した。これに伴い、日本周辺に分布するカツオ・マグロ類も国際的な枠組みのもとに管理されることとなった。こうした情勢の中、日本周辺を回遊するカツオ・マグロ類について、資源量評価やその動向予測、我が国周辺への来遊量の予測等に不可欠な科学的情報を収集、整理することを目的に、独立行政法人水産総合研究センターの「日本周辺国際魚類資源調査委託事業実施要領」に沿って調査を実施する。本調査事業は水産総合研究センター遠洋水産研究所を中心とする全国的な組織のもと実施された。この中で、本県は県内所属船によるカツオ・マグロ類の漁獲状況や漁獲物の生物的特性に関する情報収集に当たった。

## 方法

沿岸小型船(竿釣り・曳縄・延縄漁業)によるカツオ・マグロ類(クロマグロ、キハダ、メバチ、ビンナガ)の県内主要水揚港である和具、浜島、宿田曾、紀伊長島、尾鷲港と大中まき網漁業による水揚げのある奈屋浦港の計6港において、漁業種類別の水揚量調査を実施した。また、浜島、贅浦、奈屋浦、尾鷲の各港においてはクロマグロを対象に漁獲物の魚体測定を実施した。

一方、近海・遠洋における中型・大型竿釣り船の漁獲動向については、三重県漁労通信連合会及び近海漁労通信会所属の標本船から「無線漁況連絡聴取簿(QRY情報)」の提供を受け、カツオ・ビンナガ漁船の月別、旬別稼働隻数及び漁獲量を緯度・経度毎に整理し、漁場の推移や漁況と海況の関連等について検討を行った。

## 結果および考察

収集したQRY情報をもとに、本県所属船のカツオ・ビンナガ竿釣り漁場の変遷を「三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括」としてとりまとめ、漁場探査の参考資料として関係漁業者に提供した。また、カツオ・マグロ類の漁獲状況及び魚体測定データは委託元の(独)水産総合研究センター遠洋水産研究所に報告し、太平洋におけるカツオ・マグロ類の資源量評価や来遊量予測を行うための根拠として活用された。得られた資源評価や来遊量

予測の結果については、県内の関係漁業者、団体に情報提供した。資源評価や来遊量予測に関する結果の詳細は関連報文で報告されるので、ここでは本県所属船の2009年漁期におけるカツオ・マグロ類の漁況経過について概要を報告する。

### 1. ビンナガ漁況

#### 1) 中型竿釣り船

QRY情報に基づく2009年の三重県中型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は4,055トンで、極めて好漁であった前々年(6,181トン)には及ばないものの、5~6月の好漁に支えられ、平年(1,937トン、1992~2008年平均)を上回る漁況となった(図1)。

中型竿釣り船によるビンナガ漁は、3月にB海区の西ノ島周辺海域で始まり、4月には西ノ島周辺海域に加え、大東島周辺海域25°33'N、131°35'Eにおいても漁獲がみられた。5月中旬以降伊豆諸島周辺海域30°N、140°Eから房総半島南~南東沖33~36°N、142~143°Eに漁場は移動し好漁となった。6月の漁場は徐々に沖合に移動し、32~36°N、142~144°Eの沿岸寄り及び33~37°N、148~160°Eの沖合寄りに形成された。7月に入ると漁獲は減少し、カツオ主体の操業となった。

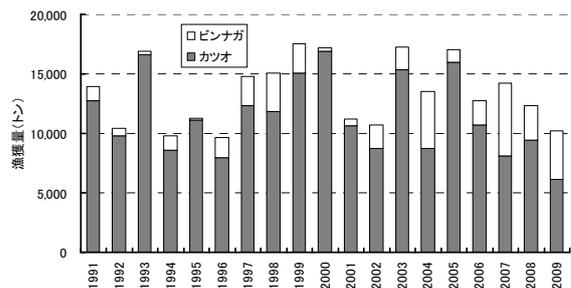


図1. 三重県中型竿釣り船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

#### 2) 大型竿釣り船

QRY情報に基づく2009年の三重県大型竿釣り船によるビンナガ漁獲量は3,899トンで、1992年以降最低の漁獲量となった前年(2,216トン)の176%となったが、平年(10,131トン、1992~2008年平均)の38%にとどまる低調な漁況となった(図2)。

中型竿釣り船と同様に、まとまった漁獲があったのは5

～7月のみで、漁場は5月には房総半島南東沖 33～34° N, 142～145° E, 6月には 33～36° N, 143～145° E の沿岸寄り及び 33～37° N, 150～160° E の沖合寄り, 7月には 36° N, 159° E 周辺海域に形成された。また、近年低調な F 海区 (天皇海山漁場), G 海区 (天皇海山沖合漁場) における漁獲はほとんどなかった。

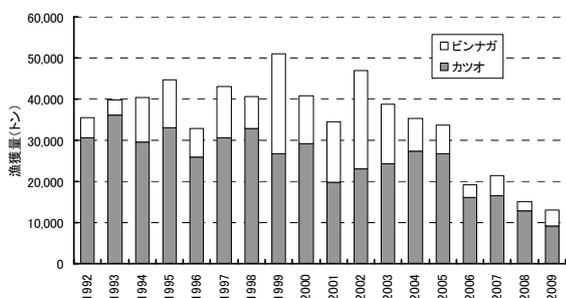


図 2. 三重県大型竿釣船によるカツオ・ビンナガ漁獲量の年変動

## 2. カツオ漁況

### 1) 沿岸小型船

三重県主要 4 港 (和具・浜島・長島・尾鷲) における沿岸小型船 (曳縄・竿釣) による 2009 年のカツオ総水揚量は 966 トンで、前年 (682 トン) の 142%, 平年値 (1992～2008 年平均: 960 トン) と同程度で、低水準が続く近年では比較的好漁となった (図 3)。

春季のカツオ漁は近年の低水準にとどまったが、夏季以降熊野灘沿岸域に広く漁場が形成され、12 月まで沿岸小型船による漁獲が続いた。また、8 月には熊野灘南部の定置網にもカツオがまともに入網した (長島, 尾鷲合計, 8 月: 3.1 トン, 9 月: 1.0 トン)。

4～6 月の漁獲主体は銘柄「中小」 (体重 1.5～2.0kg) 及び「中」 (体重 2.0～3.0kg), 8 月以降は「極小」 (1kg 以下) ～「小」 (1～1.5kg) 主体で、11 月以降は「小」～「中小」主体であった。

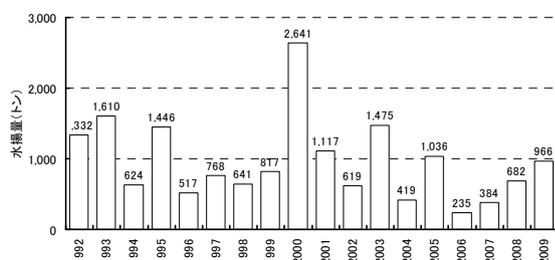


図 3. 三重県主要 4 港 (和具・浜島・長島・尾鷲) における沿岸小型船 (曳縄・竿釣) によるカツオ水揚量

### 2) 中型竿釣船

QRY 情報に基づく三重県中型竿釣船による 2009 年の

カツオ総漁獲量は 6,122 トンで、前年 (9,469 トン) の 65%, 平年 (1987～2008 年平均: 11,022 トン) の 56% と、1987 年以降最低の漁獲量となった (図 1)。

操業は 1 月中旬よりマリアナ諸島周辺海域で始まった。その後、漁場は北上し、4 月中旬以降、収斂することなく、伊豆列島周辺, 小笠原諸島周辺, 硫黄島周辺海域に広く分散した。5 月中旬～6 月下旬まではビンナガ主体の操業となり、カツオは小笠原諸島及び房総半島南東沖のビンナガ漁場の周辺海域における散発的な漁獲となった。ビンナガの漁獲が急減した 7 月には N37°, E142～155° が主漁場となり、8 月には常磐～三陸沖に北上, 9 月には N36～43°, E142～152° の海域に収斂したが、漁獲は振るわず、10 月に入り漁獲量は急減し、11 月上旬には終了した。

### 3) 大型竿釣船

QRY 情報に基づく 2009 年の三重県大型竿釣船によるカツオ総漁獲量は 9,157 トンで、1992 年以降最低の漁獲量となった前年 (12,892 トン) をさらに下回り、平年 (25,955 トン, 1992～2008 年平均) の約 1/3 の極めて低調な漁獲量となった (図 2)。

2006 年以降の漁獲量の減少は三重県所属の大型竿釣船の隻数の大幅な減少 (2005 年: 20 隻, 2006 年: 12 隻) に起因すると考えられるが、本年度は年間の CPUE (1 日 1 隻あたりの漁獲量) も 4.4 トンと前年 (5.4 トン), 前々年 (7.0 トン) を下回った。

### 3. クロマグロ漁況

三重県内主要 6 港 (和具, 浜島, 宿田曾, 奈屋浦, 紀伊長島, 尾鷲) における 2009 年のクロマグロの総水揚量は 54 トンで、前年 (24 トン) の 229%, 平年値 (52 トン, 1995～2008 年平均) とほぼ同程度で、近年の平均的な水準となった。漁獲の主体はまき網で、水揚量の 71% を占め、次いで定置網 (16%), 沿岸カツオ一本釣り (7%), 曳縄 (5%) が多かった。

一方、夏季に行われる養殖用種苗のヨコワ (0 歳魚) 漁は、例年より来遊が遅れ、7 月下旬に始まった。養殖種苗用のヨコワ漁が盛んな浜島地区における 2009 年漁期の総漁獲尾数は約 8,800 尾で、前年 (約 9,400 尾) と同程度の採捕尾数となった。

## 関連報文

平成 21 年度国際資源対策推進委託事業「日本周辺国際魚類資源調査」報告書, (独) 水産総合研究センター, 平成 21 年度三重県竿釣りカツオ・ビンナガ漁況総括, 三重県水産研究所。